

和名抄地名新考(三)

工藤 力男

考 察(承前)

工藤(2003a)を受けて、山城国の残る地名の考察を書き継ぐ。明快なように見えながら容易には解きにくいものがある。

人名・書名・和暦下の括弧内に横書きした算用数字はキリスト暦による年次、歌の下の括弧内の漢数字は『国歌大観』または『新編国歌大観』の歌番号である。

九 山城国紀伊郡深草郷

先師濱田敦教授の講義は、当郷を論じた時間が最も濃密であったという記憶がある。無理もない。邨岡良弼『日本

地理志料』(1902)が人々の手にはいりやすくなったのは、縮刷版二冊が先師の開題を付して刊行されたからである。明治三十六年に完結した初版から六十数年、あえて再び版に載せる意義はその開題に詳しい。その中で、著者の邨岡良弼の業績に触れて、吉田東伍『大日本地名辞書』(1900)に優ることを述べる。そして、郷名の考証に及ぶ発言が一つだけある。当郷「深草」である。

先師の業績を紹介することがこの「新考」の目的の一つであるとは初回到述べた。ここでは特にその趣旨に沿って、初めに開題のその部分と受講ノートを要約して示す。

邨岡良弼は、深草の訓「不加乎佐」が「不加字佐」の誤写であること、江戸時代の整版本の訓「不加久佐」は後人の賢しらであること、『和長卿記』に「後

深草院」の「後」を音読みせず「のちの」と読むとあるのは、「後」を音読みすると後深草はゴフカウサとなつて「御不孝者」と聞こえるからだ、としている。そのころ深草がフカウサと呼ばれていたことを伺わせる記述である。が、良弼が誤写とした元和刊本の「不加乎佐」、高山寺本の「不賀乎佐」がむしろ正しい。

日本靈異記の中巻第十二縁に、「時行基大徳、有紀伊郡深長寺」とある。この深長寺はフカウサ寺と読むのだろう。この深草郷にあつた寺の名「フカクサ」が、ウ音便化して *fukakusa* になつた。しかし、語中に母音連続の生ずることを避けて *u* を *wo* に変えたフカウサデラと呼ばれた。その結果、「深長寺」と書かれるようになったのだろう。平安時代、母音連続を避けて、外来語でも子音や半母音を付した例がある。例えば「相違」を「さをい」と書き、「芭蕉」を「発勢平波」、「襖子」を「阿乎之」（和名抄）、「簫」を「世平乃不江」（亨和本新撰字鏡）と書いたものなどがそれである。『悉曇要訣』には「深草をフカウサといふ」とある。文字に引かれてフカクサに戻るの、庶民に漢字が普及したのちのことだろう。

右に挙げた『和長卿記』は、後柏原天皇の侍読、大藏卿、大学頭を勤めた文章博士、東城坊菅原和長の日記。長享元年（1481）から享祿二年（1529）まで、十五六世紀の交の学問思想界の動向を知るうえで有益なものと言われる。『地理志料』は当該条の結論を述べるだけで年月を記していない。原文が見たいと思つたが、写本がいくつかの文庫に分蔵されており、全てを簡単にみることはかなわない。宮内庁書陵部収蔵の六冊だけ（延徳四年、明応二・五・六・七年、文亀三年）の通読では見当たらなかつた。『地理志料』以前にこの条を引いている『貞丈雜記』巻之二から、新訂増補故実叢書版に拠つて、訓は省き、適宜に句読を切つて掲げる。

一、後ノ字ノ事 和長卿日記曰、凡儒中故実者、天子之追号後ノ字用三音読、大臣称号之時、後字用二訓読、是通法之故実也。後深草院一号者用二訓読云々。其様御不孝之読不三聞好ニ之義也。（以下略）

貞丈は本条の最後に「後深草院ヲノチノフカウサノ院トヨム習也。ゴフカウサト読ミテハ、御不孝ト云ヤウニキコエテワロキユヘ、ノチノフカウサトヨム也」と割書きしている。

『悉曇要訣』は平安時代の学僧明覚の著わした音韻学の書で、その晩年康和三年（1011）ころの著作とされる。その巻第二、本朝の相通（現在のいわゆる音便）について述べたくだりを、大正新修大蔵経版から現行の仮名字体に変えて引くと、「深草^フフカウサ^ツイフ、ワラグツ^フワラウツ^ツ云フ、シタグツ^フシタウツ^ツイフ。当^レ知クウ相通也。」とある。院政期には母音連続回避傾向が緩んでいたとも、常にフカラサの形で実現したわけではないとも解釈することができる。

靈異記の中巻第十二縁は蟹の報恩譚である。山背国紀伊郡の部に住む慈悲ぶかい女人が、八匹の蟹を自分の着衣と交換に村童から救い、また妻になることを約束して蛇から蝦^{かえる}を救った。娘が蛇の妻になることを父母が愁えて行基のもとに向いて事情を話すくだりに、右に引いた十二字の原文が見える。

右に紹介した『地理志料』言及部分は三百字に満たず、わたしの講義ノートも簡単な走り書きなので、師説を正確に把握しているかおぼつかないのだが、どうも「深長寺」が靈異記本来の文字であったと言わんとする印象を与える。しかし通説では、奈良時代、語中に音韻としての単独母音

はなかったとする。築島裕（1966）によると、平安時代の訓点に見える語中のウ音便の早い例として確かなものは、『金光明最勝王経』（889）の「詣^{マウ}マウテ」、『金剛波若経集驗記』（909）の「辨^{マウ}マウケ」などがある。クのウ音便形は平安時代中期になって初めて現われ、「微」を「久波之字須」と読んだ『周易抄』（900）の例が最古かという。古今和歌集巻第十に「秋近う野はなりけり白露のおける草葉も色かはりゆく」という物名歌^{ものなうた}がある。「秋近う」に「さちかう（桔梗）」を隠したもので、話し言葉で形容詞のウ音便が行われていた証拠とされる。この歌集は十世紀初頭に編まれた。

日本靈異記の成立については、下巻の序に「延暦六年」、同巻第三十九縁に、平安の宮に十四年天下を治めた天皇つまり嵯峨天皇の記事があり、それは弘仁十三年を指す。そこで、延暦六年（884）が原撰本の成立、弘仁十三年（883）が増補本の成立かとする説が行われる。それによっても、靈異記著作時に深長寺が存したとして、それを深草寺^{ふかくさでら}のウ音便として解くには、日本語史学の教えるウ音便発生期より著しく早い例になる。もつとも、語の複合の意識が緩むと、語構造の把えかたが変って異分析されることがあり、

そこに音韻変化の忍び込む契機がある。しかし、基礎語と言える二音節語「深」^{フカ}「草」^{カウ}による、最も安定した四音節語フカウサである。fukakusa 四音節の頭音はすべて無声子音であつて、^hが有声音化しやすい環境にあつたわけでもない。複合語後項の語頭クのウ音便化は、いかにも早すぎる気がする。さらに、興福寺の住僧景戒が隣国の寺号の崩れた呼び方を知り、自分の著作にあえてその形で記すか、という問題もある。かくて、ウ音便の一般化より遡ると考えることに不安が拭いがたいのである。

ほかに解釈する術はないだろうか。いま考えられるのは、日本霊異記の「深長寺」は「深草郷」と直接には関わらないとする解釈がひとつ。これには音読みと、訓読み「フカヲサ寺」の二つが考えられる。角川文庫版『日本霊異記』（板橋倫行校注）に「じんちやうじ」の音読みで、「大秦廣隆寺の末寺に紀伊郡の法長寺が見え、深草寺ともいつたと見える。その寺か。」としたのがひとつ。だが、「深草寺」がなぜ「深長寺」と書かれたかについては言及がない。しかも典拠を示さない脚注なので検証のしようがなく、のちの研究者にも取り上げられることがなかった。広隆寺の歴史に関する最新の研究、林南壽^{イムナムス}（2003）に就いて見ても手

がかりが得られなかった。もつとも、本書巻末の参考論著目録には、単行本が十六点、寺史関係だけでも三十一点が挙がっているの、全部を丹念に読んだら何か見つかるかもしれないが、今は判断を保留するほかはない。因みに、広隆寺に関する基本文献かと推測する、橋本正『大秦廣隆寺史』を国立国会図書館は収蔵しない。

残る説は行基の伝記に基づくものである。唯一の伝本である『行基年譜』（続々群書類従）によると、行基六十四歳の天平三年九月二日に起工した「法禪院」が、山城国紀伊郡深草郷にあるという。行基の伝記には不明な部分が多く、この年譜も誤写が多いとされるが、深草郷に複数の寺を建てることは考え難い。その寺が行基への親しみをこめて所在地の名で、「ふかくさ寺」と呼ばれたことは充分にありうることである。この説に立つには、厳密に言うとう「深草」から「深長」への書き換えあるいは誤写を言わなくてはならないが、それを証明する方策は何か、仮説を立てて考えるために、当郷の呼び方の変化の軌跡を概念化すると次のようになるうか。

- ① フカウサ（奈良時代から平安時代初期まで）
- ② フカウサ（クがウ音便化した平安時代中期）

③ フカラサ (右同期に語中ウ音を回避した形)

④ フカウサ (母音連続回避傾向が緩む院政期)

⑤ フコーサ (母音連続が長音化した室町時代)

⑥ フカクサ (文字によって回帰した江戸時代以後)

②と③を分けて書いたが、この変化は踵を接して生じたとも、両形が併存していたとも考えることができる。⑤の「フコーサ」は、カウ∨コーの変化によって、開長音で実現したはずである。高山寺本和名抄は平安時代後期から院政期に書写されたとする通説によると、それは④の時期に当たる。靈異記の中巻に院政期を遡る写本はない。すると、それ以前の伝写過程で「深長寺」の本文が生じていたと考えても不つごうはない。平安時代初頭の景戒による本文と見るよりも、ウ音便化後の③のところに書写する段階で本文に反映したと推測するのである。それが来迎院本靈異記に引き継がれた可能性を考えてよいだろう。

以上、日本靈異記が成立した時点で、深草寺が深長寺と書かれるような音変化が生じていたと考えるのは無理であること、院政期に書写され来迎院本以前の本にその文字があった蓋然性を考えることを述べた。この仮説の危うさをわたしは充分に自覚しているが、現在の材料で考えられ

る限りでの試解として提出するものである。

池邊彌「和名類聚抄郡郷里驛名考證」(1981)の当郷の用例は、欽明即位前紀から廿三例すべて「深草」であって、「深長寺」は見えない。これが深草郷と関連するとは考えなかったのだろう。しかし、右に推論した条件を付してその用例に加えるべきこと、そこへの道を初めに拓いたのが濱田敦であることも記憶しておくべきだ、とわたしは考える。

十 山城国久世郡殖栗郷・羽栗郷

本条の見出しが変則的なのは、当郡の郷数、郷名、訓について、諸本間の異同が大きいことによる。初めに高山寺本と大東急本の字面をできるだけ忠実に掲げる。

《高山寺本》

竹淵太賀 那羅奈 水主 那紀奈
久世 殖栗名栗 栗前久利 富野止无

拜志

《大東急本》

竹淵多加 奈美 那羅 水主 那紀
宇治 殖栗 栗隈久里 富野止無 拜志

久世 羽栗

「栗」字の付く郷名の多いこと、ナ音を語頭に有する郷名

の多いことから、両本の違いは、目移りによる誤写によって生じたのではないかと想像される。

さて、殖栗郷・羽栗郷は古代文献にどのように出現するだろうか。長い引用になるが、『池邊考證』の全例に番号をつけて掲げる。

1 殖栗郷 正倉院丹表古文書

天応元、十二、六、奥書、題跋、1

天平勝宝六、閏十、廿九、佛説灌頂經奥書

2 列栗郷 弘福寺田數帳、天平十五、四、廿二

3 竝栗里 山城國風土記逸文（天理本神名帳裏書）

4 列 栗 安和二、七、八、法勝院領目録

5 南郡社 山城國風土記逸文（天理本神名帳裏書）

6 雙栗神 三代、貞觀元、正、廿七

7 雙栗神社 延喜式神名帳（九條本）

8 殖栗王 天武紀十一、六、癸酉

9 並栗臣 弘福寺田數帳（天平十五、四、廿二）

10 殖栗連 新撰姓氏録、左京神別

用例番号1・8・10に、殖栗郷が三例、殖栗王・殖栗連各一例あるが、「羽栗」は掲げていない。その代りと言うべきか、列栗郷・竝栗里などがある。これは和名抄に見えな

い郷なのだが、いちおう「列栗郷」で代表させておこう。2と9、3と5は、それぞれひとつ資料の中に見えるものである。かくて、もともと和名抄記載の郷名は、殖栗・羽栗・列栗の三郷なのか、いずれか二郷なのか、いずれか一郷なのか、つごう七とおりの可能性が考えられる複雑な問題だということになる。

まず1の「殖栗郷」は、初出の天平勝宝六年の郷名から、この地を本貫とするらしい8・10の氏連まで表記が一定なので、奈良時代には確かに存在したと考えてよいだろう。

次に2「列栗郷」は、「弘福寺田數帳」の末尾の割書きにあり、当郷の戸主として並栗臣氏が数名見える。この地を本貫とする氏と見てよいだろう。

3と5の山城國風土記逸文は左記のとおりである。

雙栗社 風土記 南郡社社祇 名宗形阿良足神 里號竝

栗云々

「里號竝栗」が郷里制時代の呼称であることを伝え、「南郡」がナミ久リ（第三音節の清濁は不明ゆえ万葉仮名「久」で書く方式を採る）の音仮名表記であり、それが6・7の「雙栗神」「雙栗神社」に相当することも言うを待たない。かくて、現存諸本には見えない「並栗郷」がもともと存し

た郷名であることは確かであろう。

大東急本にのみ見える「羽栗郷」はどうだろうか。この郷名に関して古代文献で得られる手がかりは多くない。古事記孝昭天皇段に「羽栗臣」、新撰姓氏録の左京皇別に「葉栗臣」、山城皇別に「葉栗」、続日本紀宝龜七年八月八日条に「山背国乙訓郡人外從五位下羽栗翼賜姓臣」とあるなど、いずれも氏の名として見えるのみである。平凡社『日本歴史地名大系 京都府の地名上』(1988)はこれをもって羽栗郷の郷域を詮索するが、そこまで踏み込むことをわたしはためらう。『地名辞書』は、延喜式の雙栗神社が「今佐山村大字佐古に在り、然らば羽栗は佐栗の誤にやあらん」と推測するが、そうするには、『池邊考證』の2から7までと9の「並栗」類も誤写とする勇断が必要になる。それよりもむしろ、雙栗のままに伝えられた社名の「雙」がある時点で音読みされ、「雙栗」にサウグリの重箱読みを生み、それがさらにサグリに変化したと見るべきである。

『地名大系』は、明治十六年の『久世郡神社明細帳』に羽栗・殖栗両郷に鎮座する杜ゆえに命名されたと説明し、昭和三年の『佐山村郷土誌』には、羽栗から双栗に転化し

たとする、という。いずれも古代文献の「雙栗」を無視したことになるので、採ることはできないし、天平期から存する殖栗郷についても説明がつかない。後者は、その転化が文字の上に生じたのか、音声の上に生じたのか、その経過が説明できず臆測の域を出ない。

『地理志料』は、この郷名の「雙」が俗に「双」で書かれ、それが「羽」と似るので、「羽栗」は「双栗」を誤写したもので、「奈美久利」と読むべきだとした。これに近いたちばを採るのは、日本古典文学大系本の風土記(秋本吉郎校注)である。すなわち山城國風土記逸文の「苧栗里」の頭注に、「和名抄の郷名に羽栗とあるにあたる(羽栗は苧栗の誤写か)」とある。『池邊考證』の解釈はこれと対蹠的で、巻末の註28に、秋本氏が「苧栗」かとした郷名は「殖栗」に当てるべきものと断じている。池邊氏がかく断じた意図と根拠がわたしには分からない。池邊氏の記述は、右に見た3乃至7の苧栗里・雙栗・南郡の存在を無視することになりはしないだろうか。

なるほど、平安時代初期まで郷名として文献に残るのは殖栗だけなのだから、それは厳密な態度と言えるかもしれない。しかし、奈良時代には確かに郷里名「列栗」が存在

して神社名が長く伝わり、地名も十世紀後期の安和二年まで残っているのだから、「列栗」が郷名としても存続したと考えることに不都合はない。よってわたしの結論は、奈良時代の「殖栗郷」こそ後に消滅したのであって、「列栗郷」は長く存したと考える。「池邊考證」と対照的なのは『地名大系』で、「殖栗」も「なぐり」と読んでいる。

諸本間の文字のずれを、わたしは次のように考える。高山寺本の「殖栗^{名栗}」は、本来、二字の郷名「双栗」であったが、「ナミ久リ」から「ナグリ」に転じて「名栗」と書かれた。それが「殖栗」の訓に紛れたのは、もとより「殖」字の偏と「名」との類似による。大東急本の「羽栗」は、『地理志料』に言うように「雙栗」が「双栗」と書かれて字形の類似から誤写されたものである。

「羽栗」氏は実在したが、郷名はなかった。「殖栗郷」は奈良時代以降、次第に衰えていった。「列栗郷」は古代以来の郷名であるが、そこに鎮座した神社も入れると、頭字が並・列・竝・雙・双・南と多岐にわたった。簡略な「双」で書かれたことがかえって語形変化を促したこともあったが、和名抄原本には記載されていた。これがわたしの結論である。

十一 山城国綴喜郡甲作郷

正倉院文書の奴婢帳に「甲作里」二例、続日本紀に「山背甲作」一例が見えるだけの郷名である。「池邊考證」にはこの三例のほか、次に論ずる「甲（伽和羅）、崇神紀十年」も掲げている。江戸時代の地誌は、遺称地として、田原郷の符作村（山城志）を当てるほか、現在の田辺町に当たる河原村（山城名勝志）などとした。谷川士清『日本書紀通證』(1986)は後者に同じく河原村とし、いにしえは皮を用いて甲を作ったから伽和羅と言うので、甲と瓦が同じなのは、鱗と甲が似ているからだとした。『地名辭書』の「蓋田辺村を云ふ。今田辺の東に大字河原^{カハ}あり。甲は古言カワラと云ひ、甲作の部民此に住したるか、武殖安彦の族党なるべし」も、『書紀通證』の説を受けたものである。『地名大系』も、古くは甲を皮で作って「かわら」と呼んだとして、郷名を「かわらつくり」と読んでゐる。右の諸書の記述で、「甲」は「よろい」を意味し、読みは「カワラ」だといふのである。

甲作郷を河原村に比定する根拠は、右に引いた『地名辭書』に見える崇神紀十年九月、武殖安彦謀反の条による。

このくだりには、那羅山^{ならざん}、挑河^{いんがは}、泉河^{いづみかは}、羽振苑^{はふりその}、糞禪^{くそぜん}、樟葉^{くさば}、我君^{あき}など、山城国南部の多くの地名起源説話を含む。その一部、武殖安彦の軍衆が敗れる際の記述である。日本古典文学大系本の訓読文を引く。

乃^{すなは}ち甲^{よろひ}を脱^{はな}きて逃^にぐ。得^え免^{まな}るまじきことを知りて、叩^{たた}頭^{あたま}みて曰^{いは}く、「我君^{あき}」といふ。故^{ゆゑ}、時人^{ときの人}、其^{その}の甲^{よろひ}を脱^{はな}きし処^{ところ}を号^{なづ}けて、伽和羅^{かゐら}と曰^{いは}ふ。

同地に関わる別の地名起源説話が仁徳即位前紀にも伝えられている。大山守命が皇太子を殺して帝位を奪おうとしたとき、計画を聞いた皇太子の策略にかかり、乗船が顛覆して水に沈んだ。その屍を探したところ、「考羅^{かうら}濟^{たり}」に浮いていたという。これは古事記では前代の応神天皇段の説話になっており、鉤で屍体を探したところ、衣の中の鎧に掛かつて「訶和羅^{かゐら}」と鳴ったので、そこを「訶和羅之^{かゐらの}前^{まへ}」と名付けたというのである。地名起源の話としては、鉤が鎧に当たったときの擬音語によって地名カワラが起ったと伝えるに過ぎない。この擬音語カワラについては、工藤(2008)に琴歌譜の「天人の 作りし石田は いなゑ 石田は 己男^{おのを}作れば かわらとゆらと鳴る」をめぐって、農具の刃が石に当たると解して不都合のないことを述べ、そ

のついでに訶和羅^{かゐら}の前^{まへ}にも触れることがあった。この説話は、鉤も甲も硬質の物だからこそ成立する話である。古くは甲を皮で作ったからという諸書の説明は通らないだろう。初めに引いた後世のいくつかの説は、その「カワラ」を「カハラ」で解いて「河原」と結び付けたものである。勿論、擬音語のカワラと河原のカハラは、第二音節の子音の有声と無声の差でしかないので、その蓋然性は否定しざることは難しい。しかし、『書紀通證』の「甲云「加和羅」瓦亦^レ同」、それを受けた「地名辭書」などの説を肯なうことはできない。大陸から将来された「瓦」は、九世紀初頭の文献に「カハラ」の訓で見えている。「甲作」がカワラツクリであつたら、平安時代の中ごろに生じた体系的な音韻変化(いわゆるハ行音の転呼)で、「カワラツクリ」になった「瓦作」との間で同音衝突を生じたはずである。しかし、この二語のあいだにさような現象があつたということわたしは知らない。

右の訓読文には「甲」を「よろひ」と読む。これは『地理志料』の説、すなわち、和名抄調度部に唐韵を引いて「鎧、甲也、和名與呂比」として與呂比都久利と読んだことに尽きる。甲作郷はヨロヒツクリ郷であつて、カワラツクリ

ではない。「池邊考證」の資料の挙げ方は、当然「甲作」をカワラツクリと読んだことを意味する点で不適当なのだが、カワラツクリの用例としてこれを挙げるなら、仁徳即位前紀の「訶和羅」も、古事記応神天皇段の「訶和羅之前」も挙げるべきであつたということになる。

十二 山城国相楽郡蟹幡郷

高山寺本では当郷以下の三つの郷名を缺く。この相楽郡は七郷から成るので、一行に四郷ずつ書写した本で、二行めの三つがそっくり脱落したことになる。

大東急本の訓「加無波多」は、これが和名抄編纂時の訓とは断じえないが、カンバタと呼ばれた時期があり、いま山城町に残る綺田かばたと考えられている。『池邊考證』には十の異なる表記のもとに十七の用例を挙げた。用例は豊富で、日本語史の観点からもほぼ自然に説明できるので、この郷名は近年さほど議論されることがない。だが、わたしにはまだ分らないところがある。諸書の記述と重なる所が多いが、経過をおおまかにたどる。

垂仁紀三十四年三月条、天皇が山背国に幸したとき、山背の大国ノ不遲ふぢの女に「綺戸辺」という佳人があると聞き、

それが得たいと思つた天皇は遇うことを「祈ひて」、実現すると後宮に納れた。これより先に天皇は、山背の「荊幡戸辺」を娶つて三人の皇子を得ていた。つまり日本書紀では、天皇が娶つた山背の女は「綺戸辺」と「荊幡戸辺」だといふのである。古事記垂仁天皇段では系譜のくだりに、これが山代の大国ノ淵の二人の女「荊羽田刀辨」おとかりはたとべ「弟荊羽田刀辨」姉妹となつている。なお、『地名大系』の当郷条に、日本書紀の綺戸辺・荊幡戸辺を「姉妹」としているが、現存の日本書紀にそう書いた伝本はない。とまれ、この女性名が当郷の地名に関わるだらうとは大方の説である。

「綺戸辺」の「綺」は、新訳華嚴經音義私記に「綺加尼波多」と見える。この和訓は、岡田希雄(じよ)に従つてカニハタと訓ずる。これは、郷名「蟹幡」の表記が成立した時点の語形と考えられるカニハタと合致する。織物の一種の「綺」がカニハタと呼ばれるゆえんは、紋様が斜行する織物だから、と諸注に言うとおりでらう。和名抄(廿卷本)の錦綺類の「綺」にも「一云於利毛能、又一訓加无波太」「似錦而薄者也、积名云、綺、基也、謂方丈如基也」とある。訓「加无波太」はカムバタで、カニハタの転なのであろう。日本書紀撰述の時期、「綺戸辺」は「カニハタ

トベ」と呼ばれていたことになる。

なお、古事記開化天皇段に、皇子の日子坐王が娶った山代之名津比売の亦の名を「菰幡戸辨」と伝えている。山代の菰幡戸辨なのだから、垂仁天皇条の二人と同じ資格で当郷との関わりを考えるべきだとわたしは考えるが、『池邊考證』にはこれを挙げていない。記紀間の異同について、日本古典文学大系本『日本書紀』垂仁紀の「綺戸辺」の補注と「菰幡戸辺」の頭注に「紛らわしい」とあるのは無理もない。

これらの関係にについては本居宣長『古事記傳』(1788)が詳しい。古くはカリバタと言ったのがカニバタ(郷名「蟹幡」)に転じ、さらに音便で「加牟婆多」になったとした。その経過を岡田希雄は、二とりはしばしば音通することと知られる音だとした。その根拠が早く本居宣長『地名字音轉用例』(1808)に述べられていることは周知の事実である。すなわち、その「ンノ韻ヲラノ行ノ音ニ転ジ用ヒタル例」として、讃良(サララ)・播磨(ハリマ)・平群(ヘグリ)・八信井(ハシリキ)・駿河(スルガ)・群馬(クルマ)・敦賀(ツルガ)・訓覇(タルヘ)・訓覧(タルベキ)を挙げた。八信井は萬葉集の例(一一三)で、地名と言えるか否か

微妙である。播磨は宣長の誤認だ、と濱田敦(1956)は言う。これらをn-rの相通と認めるか否かについては議論がある。わたしもその議論に加わって、工藤(1980)でそれを認めていいと書いたもので、ここに詳しくは述べない。とまれ、古代の日本語で、地名の表記においては、n-rの相通が生じていた節があるのである。カリハタ・カニハタをこれで解くことに大きな不都合はない。

わたしは次のように解釈する。このくだりは、古事記の伝承が日本書紀より古いと考える。二人は地名「カリハタ」を名として負う姉妹で、妹は接頭辞「弟」^{おと}を冠して呼ばれていたが、第二音節りが二と聞こえることがあり、次第に紛れてカニハタの形でも実現し、それは姉の呼称になった。姉妹を接頭辞の有無で区別するよりも、別の名で呼び分ける方が自然だからである。日本書紀の記載はその変化後の名を伝えるのであろう。カリハタと分れたカニハタは、舶来の高級織物に関連づけて文字化された。天皇が「祈ひ」^{かひ}までして得ようとする佳人に「綺」の字はふさわしい。当郷の郷名「蟹幡」は「綺」を二字に延べて成立した表記であろう。

音節「ニ」が語中において撥音に転じやすいことは日本

語音韻史のイロハである。平安時代初期の撥音便是、厳密には^{エム}m音便と^{エヌ}n音便を区別すべきであるが、この郷名のばあい、第三音節「ハ」が前の音の撥音化に應じて有声音「バ」に変化した段階で、その子音は当然「m」で実現していたはずなので、訓の万葉仮名の細かな詮索は不要である。

これで紛わらしさは解消したかというところ、さにあらず。この郷名の由来も知りたいからである。宣長は『古事記傳』垂仁天皇段でこれに言及し、綺は古くはカリバタであつて、それがカニバタに転じ、再転してカンバタになつたとしている。音韻変化の結果と解釈するのだが、綺の古い語形をカリバタと設定する点が私見と異なる。

以上のほか、萬葉集四四五六番歌に無視できない用例が一つある。詠歌の状況を示すために、贈歌・題詞・左注ごと新日本古典文学大系本によつて挙げる。

天平元年の班田の時に、使葛城王の、山背国より

薩妙観命婦等の所に贈りし歌一首 芹子の裏に副へたり

あかねさす昼は田賜びてぬばたまの夜の暇に摘める芹

これ（四四五五）

薩妙観命婦の報贈せし歌一首

ますらをと思へるものを大刀佩きて可爾波の田居に芹
そ摘みける（四四五六）

右の二首は、左大臣これを読みきと^{いざとよみ}云。左大臣
はこれ葛城王。後に橘の姓を賜はりしなり。

葛城王は、橘諸兄が臣籍に下る以前の名。この時は左大弁で山背国の班田司として、十一月に始まつた班田業務に従つていた。諸注は「可爾波」を自明のように蟹幡とするが、わたしにはそれが理解できない。答歌の地名は「カニハの田居」だが、当郷の名は「カニハタ」で異なるのである。

解釈の可能性は二つあると思う。一つは、答歌を詠んだ薩妙観が、班田の業務に引つ掛けて地名のカニハタを「カニハ―田」と分解して詠んだという解。薩妙観の歌には戯れの気が感じられるので、この解は有りえなくもないだろう。古事記垂仁天皇段の姉妹の名カリハタは、その表記から「苅羽―田」と分析する可能性を残していたかも知れない。だが、垂仁紀の表記はその可能性をすでに失つていた、とわたしは考える。それにこの解は想像の域を出ない。もう一つの解は、答歌のカニハは当郷と無関係な別の地名だとするものである。その「カニハの田居」に関わりそうなのに、『古事記傳』『地名辭書』『地理志料』は引くが、

『池邊考證』など近年の諸注は採らない地名がある。古事記安康天皇段で、大長谷王子によって父の市辺王が殺害されたことを知った二人の王子、意祁王・袁祁王が、針間国に逃れる途中に食事をした「山代刈羽井」である。「カリハキ」が「カリハーキ」と理解されていたことは間違いない。日本思想大系『古事記』が、「刈羽井」の頭注に「神名帳の山城国綴喜郡に樺井月神社。今、京都府城陽市水主の付近。」とするのがそれである。『古事記傳』は「樺井月神社」について、統紀・統後紀・三代実録・臨時祭式などにはただ樺井神社とあることを指摘している。新日本古典文学大系『続日本紀』大宝元年四月丙午日条には、山背国葛野郡「月神樺井神」を「つくよみのかみ・かにはるのかみ」と訓読し、脚注に「月（読）神以下…」とあり、補注に「月神 神名式では月読神社」、「樺井神 神名式、綴喜郡に、樺井月（読脱か）神社。今城陽市水主にある。統後紀承和十二年五月乙卯条に使を遣して祈謝した記事がみえる。」とある。これらの状況証拠から、樺井月神社は「読」字の脱落したことがほぼ明らかである。この神社名「樺井」が「刈羽井」に由来する蓋然性は極めて大きい。それは、延喜雜式に、毎年仮橋を架けるといふ条文中「山

城国泉河樺井渡瀬」とある「樺井」に当たるだろう。

すなわち薩妙觀の歌のカニハは、相楽郡の蟹幡ではなく、綴喜郡の地名だったという解である。これが、当郷の初めに記した、わたしの分からないことのひとつであった。

今一つ分からないことがある。延喜式神名帳の相楽郡「綺原坐健伊那大比売神社」である。『池邊考證』はこれを用例に掲げ、九條本・金剛寺本の傍訓カムハラを添えている。他の諸注も同じようにこの神社名を用例とする。当社が現に蟹幡郷の遺称地「綺田」にあるのでそれに問題は無いのだが、語形、特に第四音節「タ」と「ラ」の差について一言あるべきだが、わたしはまだそれに接しことがない。

右に言及したほかの用例については、日本語史の視点から無理なく説明することができるので、あえて触れることはしない。和名抄郷里部の記載順に山城国乙訓郡に始まった先師の講義は宇治郡で終わった。翌年は別の講義がなされたので、この郷名について師の見解は聞くことができなかった。

十三 山城国相楽郡祝園郷

前項に述べたように、高山寺本は当郷も記載しないが、古代から近代まで当郷に関わる資料は満遍に見えるので、議論の余地はほとんどない。わたしがここで取り上げるのは、一つのささやかな問題ゆえである。

当郷の前身は、崇神紀十年九月の武埴安彦謀反の条、彦国葦軍が埴安彦軍を破ったとき、「屍骨多に溢りたり。故、其処を号けて、羽振苑と曰ふ」（訓読は新編日本古典文学全集本による）に見え、古事記崇神天皇段には、「其の軍士を斬り波布理き。故、其地を号けて波布理曾能と謂ふ」（訓読は日本古典文学大系本による）とある。記紀の伝承は、一つの地名「はふり」を同音異語の動詞「はふる」で説明しようとする興味ある事例であるが、今そこには踏み込まない。いずれにせよ、後代の人たちが嘉字「祝園」を選んで郷名にした心情は充分に理解できる。当郷の大東急本の訓「波布曾乃」は、延喜式神名帳「祝園神社」の九條本の訓「ハフソノ」と一致する。ハフリソノがハフソノに変化する過程で当然「リ」の促音化が起こったはずだが、日本語書記の歴史で促音表記は特に遅れたので、この訓が促音形か否かは分からない。

「ははそのもり」という地名がある。「能因歌枕」の「国々の所々の名」山城国条にこれを挙げ、『和歌初学抄』『和歌色葉』に受け継がれて、歌枕「ははその杜」が確立する。古代の和歌では、ハハソ（柞）すなわち後世のクヌギやコナラの紅葉の名所として詠むことが伝統であった。その杜を当郷の祝園神社とする説が江戸時代に広く行われて現在に至る。ひとたび歌枕として定着すると、類型表現の中で詠まれるのが和歌史のつね、「ははその杜」もその例に漏れなかった。

今回、数十点の注釈・辞典・地誌・歌論書を見たが、江戸時代以来の「ははその杜」祝園説がほとんどであった。この解が正當なら、平安鎌倉時代の歌人たちが、音形を無視して「はふその」を「ははその」と詠み、しかも、郷名「はふ（祝）ーその（園）」の語構造を、「ははそ（柞）ーのー（杜）」と同じく解していたことになる。はたしてそのようなことがありうるだろうか。これによく似た異分析、前項で「カニハの田居」を「かにはた」として「蟹蟠」に結び付ける解を、わたしは否定したばかりである。

当郷の表記「祝園」は平安時代以来変らず、その音形だけが変わった。その変遷過程の概略を「柞」のそれと並べ

て図式化してみよう。

祝園 柞

I期 ハフリソノ ハハソ

II期 ハフツソノ ←

III期 ハフソノ ←

IV期 ハウソノ ハワソ

V期 ← ハウソ

VI期 ホーソノ ホーソ

大東急本の訓「波布曾乃」がⅡ・Ⅲ期のいずれの語形と限定できないが、平安時代中・後期と見て大きな誤差はないだろう。ハ行転呼音形のⅣ期はほぼ平安時代後期ないし院政期、Ⅴ期は鎌倉時代ころと推定する。「ホーソノ」の形はおそらく室町時代に始まるだろう。こうして二つの語を並べてみるとその違いは明らかで、鎌倉時代までの言語生活で紛れることは多くなかっただろう。

そのことを証明できる一つの根拠がある。『新編国歌大観』に拠って勅撰集から数首の歌を引いて左に掲げる。

むすめの冊子書かせける奥に書きつけける

源国義妻

このもとにかきあつめつる言の葉をは、その森のかた

みとはみよ

(詞花集三八〇)

母身まかりて後よみける

賀茂遠久

たちよりて時雨もしばしすぐすべきははその森の陰だ

にもなし (続千載集二〇五二)

母の思ひにて侍りける時、藤原景綱がもとに

つかはしける 前大僧正禅助

忘るなよはその森はかれぬとも下葉に残る露のゆ

かりを (新後拾遺集一二四六)

右の例で知られるように、古代和歌で「ははその杜」を詠むとき、「ははそ」に「母」を掛けることが多かった。そして「母」は転呼して「ハワ」になることはあったが、「ハウ」になることはなかった。「ちちはは」という対語の均衡が崩れるからである。和歌の詠作で、ハハソ(柞)とハウソノ(祝園)とが紛れることを許さなかったわけである。少なくとも古代和歌において、ひとつ地名を読み込んだとする解釈の無理は歴然である。

歌枕は、実際の地形や位置は関心の外におかれるので、その地の実態をうかがうには散文に就くほうがよいのだが、この地名の散文の古い用例はまれで、更級日記に見るのが最初の記述であろうか。その終わり近く、初瀬再訪の途中

に「山しろのくには、そのもりなともみちいとおかしきほと也」(定家筆、御物本)とある。菅原孝標女のこの旅から半世紀のちの永長二年(1069)、堀川天皇の春日行幸の途時、この社に寄っている。『中右記』三月廿七日の条には、その行幸の子細が記録されている。「見波々曾乃毛利乃南乃駄餉所^{云々}」とある。新千載集の権僧正永縁の歌(二九〇六)の詞書にも、「奈良へくだりけるに、ははその森をすぐとてよめる」と記されている。これらの散文の中にも、「ははその杜」が祝園神社の杜であるという記述はない。

江戸時代の地誌には、具体的に村里の所在を記して、この杜に言及するものが見えてくる。十七世紀末には成立していたと想定される北村季吟の『菟藝泥赴^ど』が最も早いようだ。巻八の「柞の森」の条に「下狢につゝきて南にはふぞといふ里もあり杜も有也」「羽振苑とかきてはふぞとよむ」「柞の里のうへには、ぞ山有」と見える。ここでは郷名「祝園」の第四音節が落ちて樹種の「はふぞ」と同じになっている。新修京都叢書に拠った右の引用には、両語の第三音節が濁音表記されている。この樹種の方言を『日本方言大辞典』によって検すると、わずかに熊本県に「ハザ

コ」、福井県越前に「ホーザ」が見えるのみなので、この濁音表記は疑わしい。仮に、季吟が書き留めたその音形で実現したことがあったとしても、双方に共通するなら事情は同じなので、ここでは無視して構わない。

契沖の著作にも幾つか見える。「勝地通考目録」に「山城 祝園^{ハツノ}相楽」とあり、『和字正濫抄』「は」部に「祝園はふその」とし、「は、そのもりとよむもこ、なり」と書いて記紀の説話を簡単に言及する。その書を批判した橘成員の『倭字古今通例』に即座に反論した『和字正濫通妨抄』の「は、そのもり」条の記述は最も詳しく、「柞杜今云、すなはち神名帳に、祝園神社とある所なり」のほか、に次のような記述もある。

和名には、祝園の下に、波布曾乃とあり、祝の字によれば、はふりそのなるを、名のなかければ、りを略せるなり。は、そのもりといふは、ふとはと通はして、は、そといふ木あれば、それにいひなせるなり。の、字、そのの下なのなれば、今ひとつ、のをそへて、は、その、もりとこそいふへけれど、よこなまりて転するには、かやうの事おほかり。(『契沖全集』による)

説明が詳しくなるにつれて的をはずしていった。いさか激

していたか、碩学契沖としては不覚の誇りは免れがたいだろう。

そうした説が行なわれる中であつて、山本泰順『洛陽名所集』（万治年間刊本）は異色である。「柞は、そもりの森山」条に後拾遺集の堀川左大臣の歌などを挙げるが、「此所はさだかならず」と率直に疑義を呈したのである。疑義をさらにはつきりと述べたのが、正徳元年刊の白慧『山州名跡志』（1711）である。その巻之十六「柞ハ、シノモリ杜」条の前半を新修京都叢書から引く。

在リニ右同所寅卯間山下ニ一杜モリシタニ下有リ塚ツカ（四字略）先人所スル書レ山城名所記ニ此杜ヲ云テ。祝園ノ神社ノ杜也トイフ。是字訓相似タル故ニ。此ノ今案ヲナセリ。

「右同所」とは、加茂郡加茂町の西端の柞山を指す。柞山が古代以来存したか否か、わたしは知らない。しかし、江戸時代に広く認められてきた、「柞の杜」祝園神社を否定する説がここに登場したのである。

古代中世の和歌に詠まれた「ははその杜」は、いずこの里にあるとも明らかにされていなかった。それにもかかわらず、音韻のずれ、語構造の違いを無視して、柞の杜すなわち祝園なり、とする説に叛旗を翻したのが白慧なのだが、

わたしの見るべきことができた現代の注はすべて旧説に戻っている。

なお、『地名大系』に「羽振苑が転じて祝園になったとされる」とある。これは、「転じて」すなわち自然に変化したのではなく、神亀三年の口宣などに従つて、嘉字「祝」を含む漢字二字に意改したものだらう。よつてこれは紹介するに及ばないものである。

『文献』

（おおむね出現順に、拙稿は最後に掲げる。全文献の掲出のしかたを等しくするわけではない。数回出現するものは↓の下に再掲以後の略称を示す。）

峠岡良弼『日本地理志料』（1902）↓『地理志料』（臨川書店の復刻版による）

吉田東伍『大日本地名辭書 第二巻』（1900）↓『地名辭書』（新装版による 富山房）

築島 裕（1902）『平安時代語新論』（東京大学出版会）
林 南壽（2003）『廣隆寺史の研究』（中央公論美術出版）

池邊 彌『和名類聚郡郷里驛名考證』（1981）↓『池邊考證』（吉川弘文館）

平凡社『日本歴史地名大系 京都府の地名下』（1981）↓『地名大系』

谷川士清（1962）『日本書紀通證』↓『書紀通證』（臨川書店の復刻版による）

岡田希雄 (1940) 『新譯華嚴經音義私記倭訓攷』(京都大学国文学会)

本居宣長 (1798) 『古事記傳』卷廿二・卷四十(筑摩書房『本居宣長全集』による)

本居宣長 (1800) 『地名字音轉用例』(同右)

濱田 敦 (1959) 『播磨国名考』(『地名学研究』十二号 日本地名学研究所)

工藤力男 (1980) 『木簡類による和名抄地名の考察——日本語史学のたちばから——』(『木簡研究』十二号 木簡学会)

工藤力男 (1988) 『象徴詞と接頭辞——ぬなどもゆらに考——』(『萬葉』百六十六号 萬葉学会)

工藤力男 (2004a) 『和名抄地名新考(一)』(『成城文藝』百八十六号)

(山城国、完)

【付記】

本稿は、特に「深草郷」の項について、畏友百田謙一氏の教示を仰ぐことがあった。